「塩少々の正解」

はしもとひろこ　（30 代）

「塩少々って、どのくらい？」

結婚して初めて一緒に暮らした夜、レシピを見ながら夫と顔を見合わせた。ほどよい焼き色も、小麦粉適量も、わからない。二人とも家事は得意でなく、正解を知らなかった。

家族のことも同じだったかもしれない。私は四歳下の妹と母子家庭で育ち、夫は祖父母に育てられた。それぞれの家には、それぞれの当たり前があった。ただ、ホームドラマのような「ふつうの家族」を、お互いどこか遠いものとして見ていた。

現代日本では三組に一組が離婚する。いつそうなるかわからない。そうやって心に予防線を張り、独身時代と結婚後の口座を分けて、これを割れば財産分与完了という設計をしてから、婚姻届に名前を書いた。

入籍は一日で終わった。でも、家族になるのは一日では終わらなかった。

生活を築くことは、終わりのない実験のようだった。掃除の頻度、洗濯の仕分け、食器の洗い方。決めることが山ほどあった。

洗濯はいつ回すか。夜に回せば騒音が気になり、風呂前に回せばシャワーの水圧が弱まり、朝に回せば遅刻ギリギリになる。二人で裸のまま洗濯機と格闘した日々を経て、我が家は夜に予約して最低限を朝に干し、残りは乾燥機に頼るという案に落ち着いた。

仕組みを考えるのはいつも私だった。でも、気付けば毎朝、洗濯物を干しているのは夫だった。どちらが決めたわけでもなく、自然と役割ができていた。

六年経つ今も、生活はまだ建築中だ。冷蔵庫の中身を考え、献立を組み立て、買い物をする創造的な家事は、夫には少し未知の領域らしい。「たまには献立から考えてよ」と訴えても、中々着手していただけない。献立の固定か、買い物の固定か。模索は続く。

高校三年生の頃、夫と受験勉強をしながら担任や友達の話をした。在宅勤務が増えた今も、隣で仕事の話をする。「ラブラブオーラがない」と言われた恋人時代から、「仲いい夫婦だね」と言われるようになった。自分たちの距離感は変わっていないつもりなのだけれど。

子どもたちが生まれ、毎日の洗濯物は倍になった。それでも朝になると、夫は変わらず干している。五歳の娘は最近、私の替え歌に容赦なくツッコミを入れるようになった。夫だけだったツッコミ役が、ひとり増えた。一歳の息子はまだリズムに乗って体を揺らしているだけだから、できれば母側についてほしい。

息子の体重で起こされ、夕食の味付けに首を傾げ、子どもたちの不思議なダンスに笑い合う。何気ない日常の積み重ねが、いつの間にか、私が張っていた予防線をすっぽりと覆い隠していた。

“塩少々は、親指と人差し指でつまんだ量の塩である。”

今の私は正解を知っている。でも、「1 歳児も食べるし出汁だけでいいか」と私が鍋の前に立ち、「うん、十分野菜の味がする」と夫が味見をする。きっと子どもたちが大きくなったら濃い味を欲しがって、健康診断が気になったら薄くなるのだろう。“母の味”は今日も迷走している。